



赵春娥 编著

日本文化与风情

黑龙江人民出版社



日本文化与风情

赵春娥 编著

黑龙江人民出版社

图书在版编目 (CIP) 数据

日本文化与风情 / 赵春娥编著. — 哈尔滨: 黑龙江人民出版社, 2010.5
ISBN 978-7-207-08659-4

I. ①日… II. ①赵… III. ①文化—简介—日本
IV. ①G131.3

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2010) 第 084381 号

责任编辑: 姜海霞

封面设计: 张 巍

日本文化与风情

Riben Wenhua Yu Fengqing

赵春娥 编著

出版发行 黑龙江人民出版社

通讯地址 哈尔滨市南岗区宣庆小区 1 号楼

邮 编 150008

网 址 www.longpress.com

电子邮箱 hljmcbs@yeah.net

印 刷 黑龙江神龙联合制版印务有限责任公司

开 本 880 × 1230 毫米 1/32

印 张 10.75

字 数 260 000

版 次 2010 年 5 月第 1 版 2010 年 5 月第 1 次印刷

书 号 ISBN 978-7-207-08659-4/G · 1997

定 价 22.00 元

(如发现本书有印制质量问题, 印刷厂负责调换)

本社常年法律顾问: 北京市大成律师事务所哈尔滨分所律师赵学利、赵景波

前 言

随着中国改革开放形势的不断发展，越来越多的人已经认识到外语这个交流的工具是何等的重要了。

日本与中国是一衣带水的友好邻邦，中日建交以来，两国人民的友好交流与往来也在日益深入、广泛。现在，学习日语的人也在逐年增多。为使一些日语爱好者更好地了解日本的传统文化、风土人情以及日本的现代文明与自然，笔者参考了国内外大量的图书资料，编写了此书。希望能给读者以有益的帮助和参考。

本书从日本的历史文化、日本人生活的真实面貌、一年当中大型的例年盛事活动、日本的历史文化与其特色、主要的游览观光地、日本人的姓名和礼仪，以及他们的衣食住、日本的交通历史及现状，日本现存的社会问题、文学鉴赏等七个方面构成。为了方便读者对文章内容的理解，附有文章的译文。

由于经验不足，水平有限，加之时间仓促，书中一定有不少欠妥之处，恳请各位读者批评指正。

赵春娥

目 次

一 日本人の衣食住

- (一) 着物 (1)
- (二) 日本料理 (8)
- (三) 日本の家屋と住宅政策 (31)

二 四季に影響された日本人の生活

- (一) 日本の位置及びそれに影響された気候 (63)
- (二) 日本の四季の様子と特徴 (63)
- (三) 季節に影響された日本の住宅 (65)
- (四) 日本気候区の特徴 (66)
- (五) 日本の四季は文化との関係 (67)
- (六) 日本の四季と日本料理の関係 (68)
- (七) 日本の四季は服装との関係 (69)
- (八) 日本の四季中の祭り (70)
- (九) 日本人の自然観 (70)

三 日本の年中行事

- (一) お正月 (72)
- (二) 雛祭り (83)
- (三) 鯉のぼり (89)
- (四) 七夕祭りとお 盆 (90)
- (五) 成人式と結婚 (101)
- (六) クリスマス (111)

四 伝統的な文化とその特色

- (一) 能 (116)

(二) 歌舞伎	(118)
(三) 茶道	(120)
(四) 花道(生け花)	(129)
(五) 相撲	(138)
(六) 柔道	(151)
(七) 民族化にした野球	(153)
(八) 日本文化の特色	(159)
五 日本人の名字と礼儀	
(一) 日本人の名字	(162)
(二) 贈り物	(163)
(三) 挨拶をする	(164)
六 日本人の「縮み志向」	
(一) 日本人の「縮み志向」の概説	(166)
(二) 「縮み志向」の具体的な分類	(169)
(三) 日本人は「縮み」を好んだ原因	(172)
(四) 「縮み」志向がどのような問題となっているか	(173)
七 有名な観光地	
(一) 日光	(175)
(二) 東京	(176)
(三) 皇居とその周辺	(177)
(四) 上野公園と浅草	(179)
(五) 奈良	(180)
(六) 大阪	(181)
(七) 京都	(183)
八 日本の交通	
(一) 日本交通の歴史	(185)
(二) 日本鉄道概説	(186)
(三) 新幹線	(188)

九 文学鑑賞

- (一) 家族の家へ..... (194)
- (二) 五色の鹿 (196)
- (三) 雪国 (199)
- (四) 吾輩は猫である (208)

十 日本の社会問題

- (一) 高齢化社会 (295)
- (二) 人口が増えすぎる都市 (296)
- (三) 都市生活の問題 (297)
- (四) 人口が減りすぎる農村 (297)

参考文献..... (299)

参考译文..... (301)

一 日本人の衣食住

(一) 着物

現在日本人は、日常ほとんど洋服を着て生活しているが、絶対着物を着ないことではありません。着物は正装として、あるいは室内着として現在でも愛好されています。

日本では伝統的な衣装を着物と称していますまた、日本民族が大和民族だから、その衣装は和服ともいいます。女性の着る和服は着物として外国でよく知られた美しい衣装です。こうち一番豪華なものは、花嫁が着る打掛です。これは絹の布土に金銀の箔を織り込んだ金糸、銀糸で刺繍を施し、おおく花鳥の図案模様を描いたものが用いられます。

このほか未婚の女性と既婚の女性では、和服の模様色合いが異なり、正式な訪問か遊楽のためかなど外出の目的によっても布土模様色合い仕立方などが異なります。

洋服が体形に合わせて作られているのに対して、和服は体形との相関関係がルーズであって、着付け(着物の着方)によって身体に合わせるため着方が難しいです。日常洋服で生活している最近の若い女性の大部分は自分一人で和服を着ることができません。和服を持つ奥床しさ、落ち着きの美しさは、染織の美しさによるということ以上に、和服を着ることによってかもし出される雰囲気によるといわれます。

現在女性が和服を着る機会は少なくなり、一般にお正月や、成人式、卒業式、結婚式などの改まった場に出るときや、人の家を

正式に訪問するときなど、特別の場合に限られます。これは値段が高いこと、着付けが難し動きにくいことが原因でしょう。

女性が着物を着る機会は少なくなりましたが、男の人の着物姿はさらに珍しくなりました。普通の男の人がこのような正式な和服を穿くのは、自分の結婚式のときなど、特別な場合だけです。最近では正式な和服を一度も着たことがない男も多くなりました。着物の胸と背中のあるところにある印は家紋といって、その人の家のシンボルマークのようなものです。和服の正装では羽織・袴をつけます。

最も軽便な室内着として木綿地の浴衣は正式な服装ではなく、夏の普段着として着るものです。蒸し暑い日本では、昔、夕方お風呂に入ってから浴衣を着て寛いだものでした。最近は浴衣を着る機会が少なくなりましたが、神社の夏祭りや盆踊り、花火大会、温泉の旅館などでは、今でもよく見られます。

着物の歴史と移り変わり

▼弥生時代(織った布地を身にまとうワンピース状の衣服)



弥生時代は歴史上で有名な邪馬台国(やまたいこく)を治めた卑弥呼(ひみこ)がいた時代で、中国の歴史書「魏志倭人伝(ぎしわじんでん)」によると、女子は貫頭衣(かんとうい)といって大きい布の真ん中に穴をあけ頭を通して着る衣服、ペルーなどに見られるポンチョに似たものを着ていました。一方の男子は1枚の布を肩からかけて前で結び、もう一枚を腰に巻いて前で結んだ袈裟衣(けさい)といわれるもので、インドなどで着用されているサリーのような形をした衣服だったようです。また卑弥呼など身分の高い人物は

絹を用いた衣服を着ていたようです。弥生時代には居坐織(いざりばた)などの原始的な機織(はたお)りや紫草(むらさきぐさ)や藍(あい)などから取った植物染料を使った染めも行われていたようです。

※衣服の形態 北方系衣服…一部式といわれる、ワンピース状の衣服 南方系衣服…二部式といわれる、上下の衣服

▼古墳時代(布を裁断し縫った着物に似た、左前の上下の衣服)

古墳時代になると大和朝廷により大陸との交流も盛んになり中国など他国の影響があったようです、女子は中国の模倣と思われる「筒袖(つつそで)」の打ちあわせした上衣に、スカートのようなもので韓国のチマチョゴリに似た衣裳(きぬも)を着て、男子は同じく筒袖の打ちあわせした上衣にズボン状のものを足結(あゆい)といって膝あたりを紐で縛った衣褌(きぬばかま)を着用していたようで、この時代では男子、女子ともに打ち合わせは現在とは逆で「左前」であったようです、これらのことは埴輪(はにわ)から知ることができます。この時代には養蚕(ようさん)も盛んになったようです。

▼飛鳥・奈良時代(着物に似た、右前の衣服)

飛鳥・奈良時代には遣隋使(けんずいし)や遣唐使(けんとうし)などによりさまざまな分野で中国のものが取り入れられました。飛鳥時代には聖徳太子により冠位十二階が制定され、官吏の位階を十二階に分け、位により冠と衣服の色が定められ、また奈良時代には礼服(らいふく)、朝服(ちょうふく)、制服(せいふく)を位により服装を三分類する、三公服が制定されました。衣服では、衿(えり)を立てたコート状のもので袍(ほう)形式といわれるものが支配者階級の服装(朝服)として男子は衣(きぬ)に袴(はかま)、

女子は衣に裙(も)というものを着ていたようです。また褶(ひらみ)というものを裳や袴の上からつけていたようです。奈良時代には今までの左前の打ちあわせから、現在の「右前」の打ち合わせに改められたようです。

※袍形式(ほうけいしき) 装束を構成する前開きのガウン状の表着(うわぎ)のことを袍といい、それを着用した形式。

▼平安時代(衣服から服装、初期の小袖へ)

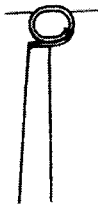
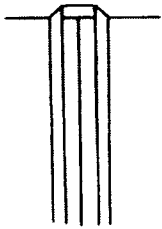
平安時代には遣唐使が廃止され、しだいに日本独自の服装に変わっていったようです。男子は朝服から束帯(そくたい)へ、女子は唐衣裳装束(からぎぬもしょうぞく)や女房装束(にようぼうししょうぞく)といわれる晴装束(はれしょうぞく)を公家などが着用していたようです。束帯、唐衣裳装束ともに袖部分は袖口の下を縫わない「大袖(おおそで)」を用い、これは現在の産着(うぶぎ)や長襦袢などに用いられる袖の形のひとつで、現在和服用語では広袖(ひろそで)ともいわれます。特に女性の唐衣裳装束の下に着用した下着を白小袖とよんだようです。また平安時代は、京都の風土の影響や宮廷文化の発達により特徴ある装束があります。(下表)

※十二単(じゅうにひとえ)

襲衣(かさねぎ)するところからついた名称で、「唐衣裳装束」「女房装束」の俗称。

	公家男子	(一般男子)	公家女子
晴装束	束帯		女房装束(唐衣裳装束)
略 装	衣袴(ほうこ) 衣冠(いかん)		
平常着	直衣(のうし)	狩衣(かりぎぬ) 水干(すいかん)	小袷(こうちぎ)
野外出	狩衣		
旅 装			壺装束(つぼしょうぞく) 衣(きぬ)かつぎ

着物・和服衿の基本形

上領(あげくび)	垂領(たりくび)
	
装束の袍(ほう) 衣冠(いかん)の袍 直衣(のうし)の袍 狩衣(かりぎぬ)の袍	衣襖(きぬばかま) 衣裳(きぬも) 直垂(ひたたれ) 女房装束 小袖など
上領は盤領(まるくび)、 丸首(まるくび)ともい われる。 領は衿、盤は円形の衿 の意味。	衿の上前と下前を 斜めに打ち合わせる 着装。

※小袖(こそで)

小袖とは礼服(らいふく)の大袖の下に着た下着、盤領(あげくび)筒袖の衣をいい現在の和服、着物の原型といわれています。平安時代中期以降には大袖の下に下着として用いていたものが、平安時代末期には肌着として白小袖を用いるようになったようです。小袖の発生には階級により以下のように違いがあります。

公家・武家・装束の下着として小袖を用い、それを白小袖とよんだ。しだいに肌着として用いられるようになった。

庶民の衣の主流であった「袖のない衣」「筒袖の衣」から「袂に丸みのある白小袖」に変わっていった。

▼鎌倉・室町時代(小袖のみの姿へ)

鎌倉・室町時代の衣服の中心は、武家男子の服装は直垂(ひたたれ)、女子は衣袴(きぬばかま)を用いました。武家階級勢力が増し政治の実権を握った時代だったこともあり、やがて戦闘などの目的に応じた実用的な服装へと変わっていったようです。装束の表着を一枚ずつ簡素化し、袴(はかま)や裳(も)は省略され下着ではない、小袖のみの衣服に変わっていったようで室町末期には現在の着物の原型ができあがったといわれています。このころから「身八つ口」のある着物になったようです。

▼安土・桃山時代(華麗な小袖と帯の姿へ)

戦乱の平定した桃山時代には、華やかな美術工芸品などで知られる桃山文化が生まれました、この時代は繡箔(ぬいはく)、摺箔(すりはく)、絞りなど緻密(ちみつ)な細工のものが多く、染織技術が飛躍的に進歩したことが小袖からもうかがえ、この時代に「辻が花染(つじがはなぞめ)」が染められるようになりました。衣服は、

男子は前時代に生まれた肩衣袴(かたぎぬばかま)が主流で、女子は打掛姿(うちかけすがた)、腰巻姿(こしまきすがた)、また庶民には名護屋帯(なごやおび)が流行したようです。

※名護屋帯(なごやおび)

文禄の役(1592)に朝鮮から現在の佐賀県である肥後の名護屋に伝わった、韓組(からくみ)の技術によって唐の糸で組んだ帯をいう。両端に総(ふさ)がついていて、絹糸を丸組みした縄状の帯。縄帯ともいわれる。長さは一丈二尺(約 450 センチ)、房は八寸(約 30 センチ)で、それを腰に幾重にも巻き後ろや横で結んで用いた。男女とも赤が好まれたようですが、白や黄色、青などを用いた多色使いのものもあったようで江戸時代初期まで流行しました。

▼江戸時代(小袖の完成形、着物と帯の姿へ)

江戸幕府は徳川家康により開かれ約 300 年の長い間続いた時代で、鎖国の厳しい封建社会でありましたが、庶民階級が経済、社会面で勢力を発揮し、町人文化が栄えた華やかな時代でもあります。元禄期(1688—1703)には、元禄文様(げんろくもんよう)とよばれる明るい色調で金糸が多く用いられた華やかな小袖などがつくられ、この頃には現在の着物とほとんど変らない形の小袖が生まれ、小袖が完成した時代ともいわれています。また江戸時代後期には、帯締め、帯揚げをを用いたお太鼓結びをするようになったようです。

▼明治時代(和装と洋装)

明治維新によって大きな変化があった時代です。開国によって他国の文化が伝わり生活様式、服装様式が急に欧米化しました。宮中の礼服は洋服となり、それによって上流社会の欧米化が進み

和洋折衷(わようせっちゅう)の服装がしだいに一般人にまで浸透しはじめました。このころの礼服は、男子は黒羽二重五つ紋付羽織袴(くろはぶたえいつつもんつきはおりはかま)で、女子は黒や色無地の縮緬五つ紋付裾模様下襲(ちりめんいつつもんつきすもようしたがさね)に丸帯(まるおび)が用いられていました。

▼昭和・平成・現在

現在の日常生活では洋服が中心となっていて、着物を着る機会は少なくなっています。一般的に着物は晴着(はれぎ)という感覚が強く、結婚式などのあらたまったセレモニーやお葬式などのフォーマルウェア、礼服として用いられることがほとんどのようです。

日本には昔から伝わる、お正月、成人式、七五三をはじめとする着物にふさわしい伝統行事がたくさんあります。また入学式、卒業式、同窓会、夏のお祭り、七夕、観劇、ショッピング、またお茶やお花、踊り、着付けなどの習い事など着物を着る機会を積極的に見つけ着物を着てみませんか。

日本の民族衣装である着物は日本人にとっても似合います。和装、洋装のそれぞれの良さを生かした合理的な衣生活を過ごされることをおすすめします。

📖本サイト着物倶楽部について、詳しい説明は左側の「いんでっくす」からお楽しみください。

(二) 日本料理

伝統的な日本の朝食は、ご飯にみそ汁、それにおかずが海苔、漬物、卵、つくだに、納豆、焼魚、梅干しなどの中から1品か2品です。最近はパン食品も大分普及してきて、トーストにコーヒー紅

茶またはミルク、生野菜や卵などにする家庭も増えていますが、1日に1度はみそ汁を飲みたいという人は大半でしょう。主婦は毎朝の食事に変化をもたせるため、みそ汁に入れるものをいろいろ工夫します。

日本の食卓では、まず見た目を大事にします。「目で食べる」という言葉があるくらいです。おかずの盛り付けはたいてい一人分ずつ別の器を用います。漬物などはときどき一つの皿に盛り付けることもあります。普通そういうおかずはとりばしを用います。特にお客さんのいるときや客になった時など、自分の食べているはしでとるのは不作法です。

はしの使い方にはいろいろきまりがありますが、いずれも、みんなが気持ちよくおいしく食事をするためのルールです。

みんなが食卓にそろったら「いただきます」とあいさつして食べ始めます。食事が済んだときのあいさつは「どちそうさまでした」です。

ところで、日本の家庭の食事には、伝統的な料理のほかにいろいろな外国の料理が取入れられ、それが日本流にアレンジされて定着してしまったものがたくさんあります。カレーライス、焼きそば、ラーメンなど、多くの日本人が好んでよく食べるものは、もともとは外国の食べ物だったと思われそうですが、いまでは典型的な日本料理のと言っていいでしょう。そして現在でもいろいろな国の料理を家庭の食事に取り入れることが盛んで、イタリアのスパゲッティや中国の餃子が夕食の食卓に並ぶことも珍しくありません。料理の雑誌や新聞の家庭欄などにもよく紹介記事が載っています。知り合いの家庭と得意料理の作り方を交換することもあるでしょう。そんな機会があったら積極的に利用して、中国料理の作り方を教え、日本料理の作り方を教えてもらいましょう。



異文化料理との折衷・交流・逆輸出入 [編集]

前項定義の「和風」の他にも、以下のように判断が付き難い場合もある。

- 明らかに折衷料理であるために判断が難しいもの(例: サラダうどん、和風スパゲティ)

- もとは海外起源であったと考えられているものの日本国内で変転があったためにもはや日本の独特の料理になっているもの(例: 焼きそば、しゃぶしゃぶ)

- 海外起源の食材や料理法を応用した日本独自の料理(例: オムライス、日本風チキンライス)

- もとは日本起源の料理が海外で改変され逆輸入されたもの(例: カリフォルニアロール)

- 素材や料理法からはどちらとも判断がつけがたい上に、和食、洋食の両方の扱いを受けているようにも見えるもの(例: 豚肉の生姜焼きとポークジンジャー)

おしなべて、比較的交通や文化交流が高速化された近代、さらに国際化にともない電話・インターネット・電子メールなどによる情報伝達手段、航空機などによる交通輸送手段が超高速化して文化交流が盛んになった現代に至って、日本料理、ないし日本式